

九人家族

只野 吉夫さん
大崎市尻北牧目

「吉っちゃん吉っちゃん」と親しまれて八十年。あの柔和でいつもニコニコしている只野吉夫さんのお人柄はどのように形成されていったのでしょうか。そのことを知りたくてお話を聞きにきました。「争わないこと」「集落のお世話をする」「おかげさまの気持ちで生きること」の実践が吉夫さんをつくり只野家の今のしあわせな九人家族があるとしたら、それらの実践がいかに大事なことから…。

●改装なった自宅パチリ。前列左から吉夫、和希、寿人、せつ子。後列左から信博、洋子、志乃、綾、剛。(2013年6月9日撮影)



正恵 何歳になったんですか？

吉夫 八十二歳。正明住職と同じ、昭和六年生まれ。

せつ子(吉夫さんの奥さま) 私は、あんだのお母さん(さわ子さん)と同じ七十八歳。

正恵 私がものごころついたときには吉っちゃんはまだもう総代としてお寺に来ていたような気がします。

吉夫 大吉おずんつあんが亡くなったので、お寺に行くようになった。大吉おずんつあんが亡くなって去年で五十年だったから、かれこれ五十年お寺さ通つてる(笑)。

正恵 どんな役をしてきました？

吉夫 玄松院の総代。北牧目の新山神社の総代。加茂神社の総代。消防が四十八年。区長が十年。

せつ子 みんなに助けでもらってね。今でも「吉っちゃん吉っちゃん」って親しまれて、家族も九人いんでますとお。しあわせですが。

正恵 役を仰せつかつているとお金集めが大変です。

吉夫 なんだね。たとえば新山神社の例大祭は毎年旧八月十五日のお名月つあまの日って決まってるのだから、そいざ間に合わせるようにみんなからお金もらわねぐね。どっからも出でくつとごないのだから。そうし

て宮司さんさご祈禱を頼みに行く。せつ子 加茂神社を建て直すとき、お観音さまの古いのがあったのね。そいざ新しくすつとぎだつて、みんなに協力してもらって、余るくせ寄付もらつて…。

年越の日には新山神社(八幡さま)を掃除に行く。そして灯りつけておぐ。雪が降つときなんかねや、二人して雪払いして。んだがら

年越の日と夜が明けがらど「二年まいり」すんの。神さまに守られれんだと思いう。

吉夫 今やつてんのは玄松院の総代と納税組合長とふたつだけですが。

正恵 大変なお役がふたつ残つています(笑)。

吉夫 フツ、フツ、フツ、フツ。

正恵 フツ、フツ、フツ、フツ、という吉っちゃんの笑いがいいんですよ。その笑いにも表れているお人柄の良さはどこで育まれたのでしょうか？

吉夫 とよのおばんつあん(祖母)大吉さんの妻)がかすこがったんだべね。波風ひとつたでだごどながつたがら。大吉つあんという人は豪傑で、張つてがらきかねがった。そいづさ一遍も突つてすごしたごどながつた。

で、とよのおばんつあんのお兄さんが栄助という人で(赤間憲孝さん、

人だちは、徴用兵みだいな形でみんな引つ張つていがいだ。んだがら、牧目さ帰つてきても部落のごどなんか分かんねの。

あんだいのお父さん(正明さん)も苦労したのさな。終戦の年には父親も母親も亡くなつてだわげだがら。栄助おずんつあんが毎日お寺さ行つてだのは俺もわがつてる。

せつ子 栄助おずんつあんの孫が私の父親(正一)で。信心深い栄助おずんつあんの影響を受けたんでねべか。で、息子(憲孝さん、せつ子さんの兄)を亡くすたんだおね。それからお経読み始めで…。

正一は、若い正明さんだちご連れで寒行さ歩つたんだつとつとお。谷地中あたりで「赤間のおずんつあん、冷てえ」なんて言われつと首たさのせでね…。

そういう親や祖父に私は「牧目さ行け」と言われ、ここに嫁さ来たの(笑)。

雑然として、あふれていた

正恵 本堂を建てる時(昭和三十年代後半ごろ)はどんな感じだったんですか？

吉夫 本堂を建てる時は、大沢の山を買つてさ、総代の人だちが行つて木出したの。

せつ子さんの曾祖父)しよつちゅう俺家さ来てだつた。栄助おずんつあんはお風呂さ入つと浮かんだもんだおねや。そいざ、ちやこい俺さ「沈めてけるー、沈めてけるー」つてね(笑)。栄助おずんつあんにも可愛がられた。

せつ子 おつびさん(栄助さん)はユーモアのある人だつたおねえ。向かいが町区の佐藤匡司家(現在佐藤敏夫さん宅)で、匡司さんからおつびさんが本を読んで聞かせらいつと、そいづを「むかし話」に直して私に聞かせだもんだお。当時匡司家は県道に面して、三神家との間が空

いつたつたのつしや。そこさ椅子、大きいのがら小さいのがら並べでね。子どもだち「赤間のおつびさん、今度べつなむかし話聞かせらいいん」なんてせがまいで。今、ああいういおずんつあにいねがすわ。

正恵 吉っちゃん終戦を十四歳くらいで体験したわけですよ。吉夫 なんだね。あのあたりはとにかく混乱して、昭和十六年に国民学校令が施行されて、高等小学校から国民学校さ移さいだ。国民学校さ一年通つたつて、俺よりひとつ下の人だちは新制中学校さ入れつて言われだ。俺だちは国民学校終つと青年学校さ。戦争中、上の学校に進んだ

正恵 吉っちゃんも行ったんですか。吉夫 行つたのお、だれ、総代だもの(笑)。忘れられないのは大沢の人だち赤犬つこをそらさ結つておいで、昼になったつてそいづ煮で喰らいだ。とつても喰えなくてさあ、お汁がグツとつてつてきて(笑)。へびでもなんでも喰つたんだが、へびを喰でたつてみな獲つてすまつていねがつた。だくれえ、そういう時代だおねや。それでもみんなの手を借りて木を出したんでがすとお。お寺に運んだのはまだ馬車だつた。移動製板といつて、お寺の前さ小屋を建てで板にしていつた。お、大つきな丸い電ノコ音立でで回つてな。

正恵 本堂を建てるときも檀家の人たちが駆り出されてましたね。夕方、うどんをみんな食べている姿を憶えています。

吉夫 総代長は荒井癸一つあん(優一さんの祖父)だつた。

せつ子 荒井癸一つあんが中埠農協の組合長だつたおね。癸一つあんが毎朝中田の方がら歩いてくる。「おはよう、おはよう」つて子どもだちの頭つこ撫ででけでね。「ああ、いい光景だなや」つて見だもんでがす。

正恵 人があふれていた時代の懐かし、しあわせな光景ですね。